

日 本 国 特 許 庁  
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日

Date of Application:

2 0 0 4 年 3 月 3 1 日

出 願 番 号

Application Number:

特 願 2 0 0 4 - 1 0 3 4 1 5

パリ条約による外国への出願  
に用いる優先権の主張の基礎  
となる出願の国コードと出願  
番号

The country code and number  
of your priority application,  
to be used for filing abroad  
under the Paris Convention, is

J P 2 0 0 4 - 1 0 3 4 1 5

出 願 人

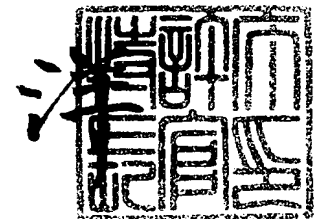
Applicant(s):

T D K 株式会社

2 0 0 5 年 4 月 2 0 日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

小 川



【官 報 名】 特 許 願  
【整理番号】 99P07419  
【提出日】 平成16年 3月31日  
【あて先】 特許庁長官 殿  
【国際特許分類】 H01F 41/02  
【発明者】  
    【住所又は居所】 東京都中央区日本橋一丁目13番1号 TDK株式会社内  
    【氏名】 増澤 清幸  
【発明者】  
    【住所又は居所】 東京都中央区日本橋一丁目13番1号 TDK株式会社内  
    【氏名】 栗田 英生  
【発明者】  
    【住所又は居所】 東京都中央区日本橋一丁目13番1号 TDK株式会社内  
    【氏名】 大塚 正幸  
【発明者】  
    【住所又は居所】 東京都中央区日本橋一丁目13番1号 TDK株式会社内  
    【氏名】 永塚 康弘  
【発明者】  
    【住所又は居所】 東京都中央区日本橋一丁目13番1号 TDK株式会社内  
    【氏名】 田口 仁  
【特許出願人】  
    【識別番号】 000003067  
    【氏名又は名称】 TDK株式会社  
【代理人】  
    【識別番号】 100100077  
    【弁理士】  
    【氏名又は名称】 大場 充  
【手数料の表示】  
    【予納台帳番号】 085823  
    【納付金額】 21,000円  
【提出物件の目録】  
    【物件名】 特許請求の範囲 1  
    【物件名】 明細書 1  
    【物件名】 図面 1  
    【物件名】 要約書 1

【請求項 1】

フェライト磁石を製造するときに用いる磁場成形装置であって、  
主としてマグネトプランバイト型フェライトからなる粉末を分散媒に分散させた成形用スラリーが注入され、前記成形用スラリーを圧縮成形する金型と、  
前記金型中の前記成形用スラリーに、所定方向の磁場を印加する磁場発生源と、  
前記金型を加熱するヒータと、  
を備えることを特徴とする磁場成形装置。

【請求項 2】

前記金型が  $40^{\circ}\text{C}$  を超え  $100^{\circ}\text{C}$  以下となるよう、前記ヒータをコントロールするコントローラをさらに備えることを特徴とする請求項 1 に記載の磁場成形装置。

【請求項 3】

前記金型は、複数の前記フェライト磁石を多数個取りするための複数のキャビティを有していることを特徴とする請求項 1 または 2 に記載の磁場成形装置。

【請求項 4】

前記金型に、前記キャビティのそれぞれに前記成形用スラリーを注入するための注入路が形成されていることを特徴とする請求項 1 から 3 のいずれかに記載の磁場成形装置。

【請求項 5】

主としてマグネトプランバイト型フェライトからなる粉末を分散媒に分散させることで得た成形用スラリーを、 $40^{\circ}\text{C}$  を超え  $100^{\circ}\text{C}$  以下に加熱した型に注入し、所定方向の磁場中にて加圧成形することで成形体を得る成形工程と、  
前記成形体を焼成することでフェライト磁石を得る焼成工程と、  
を有することを特徴とするフェライト磁石の製造方法。

【請求項 6】

主としてマグネトプランバイト型フェライトからなる粉末を分散媒に分散させることで成形用スラリーを得るスラリー生成工程と、  
前記分散媒の粘性率を  $0.70 [\text{mPa} \cdot \text{s}]$  未満とした前記成形用スラリーに、所定方向の磁場中にて型で加圧成形することで成形体を得る成形工程と、  
前記成形体を焼成することでフェライト磁石を得る焼成工程と、  
を有することを特徴とするフェライト磁石の製造方法。

【請求項 7】

前記成形工程では、前記型を加熱することで、前記型に注入された前記成形用スラリーの前記分散媒の粘性率を  $0.70 [\text{mPa} \cdot \text{s}]$  未満とすることを特徴とする請求項 6 に記載のフェライト磁石の製造方法。

【発明の名称】 磁場成形装置、フェライト磁石の製造方法

【技術分野】

【0001】

本発明は、磁場成形装置、フェライト磁石の製造方法に関する。

【背景技術】

【0002】

磁石として主流となっているフェライト(焼結)磁石を製造するには、原料を所定の配合比で混合したものを仮焼してフェライト化させ、得られた仮焼体をサブミクロンサイズまで粉砕し、フェライト粒子からなる微粉砕粉末を得る。次いで、微粉砕粉末を磁場中で金型によって圧縮成形(以下、これを磁場成形と称する)して成形体を得た後、この成形体を焼結することで、フェライト磁石を得る。

磁場成形の工程には、大きく分けて、材料を乾燥させた後に成形を行う乾式と、材料をスラリー状として成形を行う湿式とがある。

【0003】

湿式で磁場成形を行う場合、スラリー中に含まれる水分を除去する脱水を確実に行わないと、成形体にクラック等が生じ、その結果、歩留まりが低下してしまうという問題があった。

このため、従来より、金型に注入する前にスラリーを加熱することでスラリーの粘度を低下させ、脱水性を向上させるという改善技術が提案されていた(例えば、特許文献1、2、3参照)。

【0004】

特許文献1に記載の技術は、金型装置と、金型装置にスラリーを圧送する圧送装置との間にスラリーを加熱する加熱装置を備えたものである。

しかし、この技術では、加熱に電熱管やウォーターバスを使っていたため、加熱に時間がかかるという問題を抱えている。特許文献2に記載の技術は、これに対して提案されたものであり、加熱にマイクロ波を用いることで、スラリーを短時間で均一に加熱するというものである。

【0005】

また、特許文献3に記載の技術は、金型に注入されるスラリーが貯留されたタンク内で、スラリーをパイプヒータ等で直接加熱したり、タンクの外周面を熱湯等で間接加熱したり、また、タンクから金型にスラリーが自動注入される際に金型までの導入管を外周から加熱することによって、スラリーの温度を40～90℃に保持しようというものである。

【0006】

【特許文献1】 特公平1-54167号公報(特許請求の範囲)

【特許文献2】 特開平6-182728号公報(請求項1)

【特許文献3】 特公平2-13924号公報(特許請求の範囲、公報第3頁)

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0007】

しかしながら、上記のように加熱されたスラリーを金型内に注入すると、金型等によって熱が奪われてスラリーの温度が低下し、スラリーの分散媒の粘度が上昇してしまうという問題があることを本発明者らは見出した。

また、特許文献3の技術では、金型内におけるスラリーの温度を40～90℃に保持するという構成になってはいる。しかし、金型に注入されるスラリーが貯留されたタンク内で、スラリーをパイプヒータ等で直接加熱したり、タンクの外周面を熱湯等で間接加熱したり、また、タンクから金型にスラリーが自動注入される際に金型までの導入管を外周から加熱していたのでは、上記のように金型に注入した段階でスラリーの熱が奪われるため、金型内におけるスラリーの温度を40～90℃に保持することは現実的に困難であることも実験により確認された。

【０００８】

このような問題は、特に、一つの金型で成形体を多数個取りするため、金型に複数のキャビティを形成する等の理由で、大型化した金型を使用する場合等に顕著であった。金型側の熱容量が非常に大きいためである。これらの場合、上記したような従来の技術を適用したとしても、クラックが発生するという問題を有効に解決することができない。さらに、複数のキャビティが金型に形成されている場合、金型内のキャビティの位置によってスラリー温度が異なってしまう、キャビティ毎に脱水性に差が生じるために、最終的に得られる成形体の密度自体もばらつきが生じるという問題が生じる。

加えて、周囲の雰囲気温度によって金型の温度も変わるため、季節によって金型内でのスラリーの分散媒の粘度が変動し、得られる製品の品質が安定しないという問題もある。

本発明は、このような技術的課題に基づいてなされたもので、製造工程における歩留まりを向上させ、品質を安定させることのできる磁場成形装置、フェライト磁石の製造方法を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【０００９】

かかる目的のもと、本発明は、フェライト磁石を製造するときに用いる磁場成形装置であって、主としてマグネトブランバイト型フェライトからなる粉末を分散媒に分散させた成形用スラリーが注入され、成形用スラリーを圧縮成形する金型と、金型中の成形用スラリーに、所定方向の磁場を印加する磁場発生源と、金型を加熱するヒータと、を備えることを特徴とする。

このような装置では、ヒータによって金型を加熱することによって、この金型に注入される成形用スラリーを加熱し、その分散媒の粘性率を低下させることができる。これにより、磁場成形工程における成形用スラリーの脱水性を高く維持することが可能となる。

このとき、金型は、 $40^{\circ}\text{C}$ を超え $100^{\circ}\text{C}$ 以下となるようにするのが好ましく、さらには $50\sim 100^{\circ}\text{C}$ とするのが好ましい。このため、ヒータの作動をコントロールするコントローラをさらに備えるのが良い。

このような構成は、金型が、大型のものである場合や、複数のフェライト磁石を多数個取りするための複数のキャビティを有している場合に特に有効である。

また、金型に、キャビティのそれぞれに成形用スラリーを注入するための注入路を形成すれば、成形用スラリーがキャビティに注入されるまでの間に、金型の熱によって成形用スラリーを事前に加熱することもできる。

【００１０】

本発明は、フェライト磁石の製造方法として捉えることもできる。この方法は、例えば主としてマグネトブランバイト型フェライトからなる粉末を分散媒に分散させることで得た成形用スラリーを、 $40^{\circ}\text{C}$ を超え $100^{\circ}\text{C}$ 以下に加熱した型に注入し、所定方向の磁場中にて加圧成形することで成形体を得る成形工程と、この成形体を焼成することでフェライト磁石を得る焼成工程と、を有することを特徴とするものである。

【００１１】

また、本発明は、主としてマグネトブランバイト型フェライトからなる粉末を分散媒に分散させることで成形用スラリーを得るスラリー生成工程と、分散媒の粘性率を $0.70\text{ [mPa}\cdot\text{s]}$ 未満とした成形用スラリーに、所定方向の磁場中にて型で加圧成形することで成形体を得る成形工程と、成形体を焼成することでフェライト磁石を得る焼成工程と、を有することを特徴とするフェライト磁石の製造方法として捉えることもできる。

成形用スラリーの分散媒の粘性率を $0.70\text{ [mPa}\cdot\text{s]}$ 未満とするには、成形工程にて、型を加熱することで、型に注入された成形用スラリーを加熱するのが好ましい。

【発明の効果】

【００１２】

本発明によれば、金型を加熱することによって、この金型に注入される成形用スラリーを加熱し、その分散媒の粘性率を低下させることができる。これにより、磁場成形中における脱水性を高く維持することが可能となる。これにより、特に、金型が大型のものであ

る場合で、一つの金型で成形体を多数個取り出す場合等においても、又定した脱小を行なうことができ、最終的に得られる成形体の密度を均一化して品質を向上・安定化するとともに、不良品を低減し、製造工程における歩留まりを向上させることができる。

・【発明を実施するための最良の形態】

#### 【0013】

以下、添付図面に示す実施の形態に基づいてこの発明を詳細に説明する。

図1は、本実施の形態におけるフェライト磁石の製造工程の流れの一例を示す図である。なお、本実施の形態で示すフェライト磁石の製造工程はあくまでも一例に過ぎず、適宜変更を加えることが可能なのは言うまでも無い。

この図1に示すように、フェライト磁石を製造するには、まず原料を所定の配合比で混合したものを仮焼してフェライト化させる(ステップS101、S102)。原料としては、酸化物粉末、または焼成により酸化物となる化合物、例えば炭酸塩、水酸化物、硝酸塩等の粉末を用いる。仮焼は、通常、空気中等の酸化性雰囲気中に行えば良い。

次いで、得られた仮焼体を粗粉碎工程を経ることで粉碎し(ステップS103)、フェライト粒子からなる仮焼粉末を得る。次いでこの仮焼粉末に適宜添加物を添加し、微粉碎工程を経てサブミクロンサイズまで粉碎し(ステップS104)、主としてマグネトブランバイト型フェライトからなる微粉碎粉末を得る。粗粉碎工程、微粉碎工程は、湿式で行っても乾式で行ってもよい。ただし、仮焼体は一般に顆粒から構成されるので、粗粉碎工程を乾式で行い、次いで微粉碎工程を湿式で行うのが好ましい。その場合、粗粉碎工程で仮焼体を所定以下の粒径となるまで粗粉碎した後、微粉碎工程で粗粉碎粉と水とを含む粉碎用スラリーを調製し、これを用いて所定以下の粒径となるまでの微粉碎を行う。

#### 【0014】

この後、微粉碎粉末を分散媒に分散させることで所定濃度のスラリー(成形用スラリー)を調製し、これを磁場成形する。微粉碎工程で湿式粉碎を行った場合、脱水工程(ステップS105)にてスラリーを濃縮することで、所定濃度のスラリーを調製するようにしても良い。

ここで、分散媒としては、水、あるいは常温(20℃)において粘性率が0.70[mPa・s]未満の液体が好適である。常温(20℃)において粘性率が0.70[mPa・s]未満の液体としては、例えば、ヘキサン、トルエン、p-キシレン、メタノール等を用いることができる。また、分散媒は、後述の加熱された金型に注入したときに、粘性率が0.70[mPa・s]未満となるものであってもよく、上記したような分散媒だけでなく、他の分散媒を採用することもできる。

#### 【0015】

そして、このスラリーを混練した後(ステップS106)、スラリーを型に注入し、所定方向の磁場をかけながら圧縮成形することで磁場成形を行う(ステップS107)。

#### 【0016】

この後、得られた成形体を焼成して焼結させることで、フェライト磁石を得る(ステップS108)。この後、所定形状への加工を経て、製品としてのフェライト磁石が完成する(ステップS109～S110)。

#### 【0017】

図2、図3は、上記したようなステップS107の磁場成形を行う工程で用いる磁場成形装置10の概略構成を示す図である。

磁場成形装置10は、所定濃度に調製されたスラリーに対し、磁場中で圧縮成形を施すことで、フェライト粒子を配向させ、所定形状のフェライト磁石を形成するものである。図2に示すように、この磁場成形装置10は、複数のフェライト磁石を多数個取りで形成するため、複数のキャビティ13を有している。

#### 【0018】

図3は、この磁場成形装置10の一つのキャビティ13を対象とした断面図である。この図3に示すように、磁場成形装置10には、金型として上型11、下型12、白型19が備えられている。上型11、下型12の少なくとも一方は、図示しない駆動シリンダ等

を駆動部として、上型１１、下型１２を互いに接近・離間方向に動作可能となっている。  
本実施の形態においては、下型１２が、上型１１に対し所定のストロークで上下動するようになっている。

また、白型１９は、固定されていてもよいし、上下動可能でも良い。

#### 【００１９】

図２に示したように、白型１９には、個々のキャビティ１３にスラリーを注入するための注入パス（注入路）１４が形成されている。この注入パス１４は、外部に設けられた材料容器１５から、弁１６Ａを開いたときにポンプ１６によって送り込まれるスラリーを、個々のキャビティ１３に分配・注入するようになっている。

#### 【００２０】

図３に示したように、個々の下型１２は、そのストローク終端位置において、キャビティ１３にて、スラリーを所定の形状に圧縮成形するようになっている。ここで、白型１９には、下型１２との隙間をシールするシール部材１７が設けられている。

上型１１と白型１９の合わせ面には、キャビティ１３からスラリーに含まれる水分を排出するための濾布１８が挟み込まれている。これにより、スラリーに含まれる水分は、濾布１８を伝い、上型１１と白型１９の合わせ面から上型１１および白型１９の外部に導き出されるようになっている。

そして、上型１１の近傍には、図示しない磁界発生コイル等が設けられており、所定の方向の磁場を加えることができるようになっている。

#### 【００２１】

さて、図２に示したように、本実施の形態において、白型１９には、電熱線、セラミックヒータ等によって構成されるヒータ部材２０が埋め込まれている。このヒータ部材２０は、各キャビティ１３を均一に加熱できるよう決定されたパターンで配置するのが好ましい。

ヒータ部材２０には、ヒータ用電源２１が接続されており、ヒータ用電源２１からヒータ部材２０に電圧を印加することで、ヒータ部材２０が発熱し、白型１９を加熱する。これらヒータ部材２０およびヒータ用電源２１によって、ヒータが構成されている。

#### 【００２２】

また、ヒータとしては液媒を加熱する構成のものを用いることもできる。この場合、白型１９には、ヒータ部材２０に代えて、液媒を流すための流路を形成する。そして、ヒータ用電源２１に代え、液媒を加熱する熱源を備えるのである。この場合、液媒が流れる流路と熱源によってヒータが構成される。

#### 【００２３】

さらに、白型１９の温度を検出する熱電対等のセンサ２２と、このセンサ２２で検出した温度に基づき、ヒータ用電源２１を制御するコントローラ２３とが備えられている。

ところで、上記においては、白型１９を加熱する例を示したが、同様の方法により、上型１１や下型１２を加熱する構成としても良い。

#### 【００２４】

上記したような構成の磁場成形装置１０では、前記のステップＳ１０６で混練されたスラリーが、材料容器１５からポンプ１６によって、注入パス１４を通り、上型１１、下型１２間の各キャビティ１３に分配・供給される。所定量のスラリーがキャビティ１３に充填されると、図示しない磁界発生コイル等によって発生させた磁界を印加しつつ、下型１２を作動させ、上型１１、下型１２により所定の圧力を加える。これによって、スラリーに含まれる水分は濾布１８を伝って外部に導き出されることで、脱水が行われつつ、所定の形状に成形がなされる。

そして、成形の完了後、上型１１、下型１２を開き、脱型することで、所定形状に成形されたフェライト磁石が得られる。

#### 【００２５】

このようにして、磁場成形するに際し、白型１９を、コントローラ２３の制御により、ヒータ部材２０で所定の温度に加熱する。加熱する温度としては、センサ２２によって検

山とれる白型19の温度T1は40℃を超え100℃以下が良く、かつ、好ましくは50℃～100℃となるようにするのが良い。このため、センサ22での検出値に基づき、コントローラ23でヒータ用電源21を制御するのが好ましい。

これにより、例えば、温度T1=50℃となるように白型19を加熱したときには、キャピティ13内に充填されたスラリーの温度T2は43℃、T1=60℃としたときにはT2=49℃等となる。

このように、白型19を加熱することによって、金型注入前にスラリーを加熱する場合に比較し、キャピティ13内におけるスラリーの温度を確実に高くすることができるので、スラリーの分散媒の粘性率を低下させて脱水を良好に行うことができ、製品の歩留まりを向上させることができる。上記のように、複数のキャピティ13が形成されたものや、金型が大型のものである場合等にも、各キャピティ13の温度を均一にできるので、最終的に得られる成形体の密度自体も均一にすることができる。さらに、季節によって周囲の雰囲気温度が変わっても、白型19を加熱することで、そのような変動の影響を受けにくくすることができる。常に安定した品質でフェライト磁石を製造することができる。

#### 【0026】

また、白型19には、キャピティ13にスラリーを充填する注入パス14が形成されている。白型19は、ヒータ部材20によって加熱されるため、注入パス14を通るスラリーも加熱される。つまり、キャピティ13に注入される前に、スラリーを加熱することができるのである。これによっても、キャピティ13内のスラリーの温度T2を高めることができる。この場合、熱源は白型19を加熱するヒータ部材20であるので、他にわざわざ熱源を用意する必要がなく、簡易な構成で効果を得ることができる。

#### 【実施例】

#### 【0027】

ここで、スラリーの温度とキャピティ内圧の関係を調べたのでその結果を以下に示す。

まず、図1に示したような工程で、成形用スラリーを調製した。スラリーの分散媒には水を使用した。

そして、φ30mmの円盤状のキャピティに、温度を種々変化させた前記成形用スラリーを一定条件で注入し、次いで、一定の成形条件で磁場成形を行った。磁場成形には、単一のキャピティ13のみを有し、ヒータ部材20、ヒータ用電源21、センサ22およびコントローラ23を備えない他は、上記の磁場成形装置10と同様の構成の装置を使用した。このとき、注入パス14の直近かつ白型19の外部の、スラリーの注入経路上に設置した圧力センサで測定された最大の圧力を、キャピティ内圧として記録した。また、キャピティ内のスラリーの温度を測定し、スラリー温度として記録した。キャピティ内圧はスラリーの脱水性の指標となり、数値が低いほうが脱水性がよいと言える。図4はその結果を示すものである。

この図4に示すように、キャピティ内圧は、スラリー温度が高まるにつれて低下することが確認された。

#### 【0028】

次いで、金型温度とキャピティ内圧の関係を調べたのでその結果を以下に示す。

まず、図1に示したような工程で、成形用スラリーを調製した。スラリーの分散媒には水を使用した。

そして調製したスラリーを用い、図2に示した磁場成形装置10を用い、ヒータ部材20によって白型19の温度を、25℃（非加熱）、40、50、60、70℃としてそれぞれ磁場成形を行い、断面略円弧状の所定形状・サイズのフェライト磁石を製造した。キャピティ内圧は前述の方法で測定した。図5はその結果を示すものである。

図5に示すように、金型温度を上昇させるほどキャピティ内圧を低減させる効果はあるが、非加熱の場合と比較して明確な効果を得るためには、金型温度が40℃を超えることが好ましい。また、金型温度が100℃を超えると水が沸騰して気泡を生じるなどの問題を生じることから、金型温度は100℃以下であることが好ましい。

金型温度を40℃としたときのスラリー温度は36℃であった。また、このときの分散



媒（水）の粘性率を調べたところ、 $1.0 \text{ [mPa} \cdot \text{s]}$ であった。

#### 【0029】

図6に温度と分散媒である水の粘性率の関係を示した。水の粘性率は温度が高まるにつれて低下し、脱水性が改善される。つまり、上述の結果は分散媒（水）の粘性率が $0.70 \text{ [mPa} \cdot \text{s]}$ 未満となれば、キャビティ内圧の低下が顕著になると言い換えられる。

#### 【0030】

さらに、本発明と、従来のように事前にスラリーを加熱した場合の比較を行ったのでその結果を以下に示す。

まず、図1に示したような工程で、成形用スラリーを調製した。スラリーの分散媒には水を使用した。

そして、調製した成形用スラリーを用い、以下に示すような条件で、断面略円弧状の所定形状・サイズのフェライト磁石を製造した。

実施例1)：図2に示した磁場成形装置10を用い、ヒータ部材20によって、白型19の温度 $T1$ を $50^\circ\text{C}$ として磁場成形を行い、フェライト磁石を得た。

実施例2)：磁場成形装置10を用い、ヒータ部材20によって、白型19の温度 $T1$ を $60^\circ\text{C}$ として磁場成形を行い、フェライト磁石を得た。

比較例1)：磁場成形装置10を用い、磁場成形を行い、フェライト磁石を得た。ヒータ部材20による加熱は行わず、白型19を常温のままとした。

比較例2)：磁場成形装置10を用い、磁場成形を行い、フェライト磁石を得た。このとき、ヒータ部材20による加熱は行わず、その代わりに、材料容器15から金型にスラリーを注入するホースの途中に加熱装置を設け、スラリーを $50^\circ\text{C}$ に加熱した後、金型内に供給した（従来技術に相当）。

比較例3)：磁場成形装置10を用い、磁場成形を行い、フェライト磁石を得た。このとき、ヒータ部材20による加熱は行わず、その代わりに、材料容器15から金型にスラリーを注入するホースの途中に加熱装置を設け、スラリーを $70^\circ\text{C}$ に加熱した後、金型内に供給した（従来技術に相当）。

#### 【0031】

実施例1、2、比較例1～3のそれぞれにおいて、キャビティ13内のスラリー温度 $T2$ およびキャビティ内圧を測定した。表1はその結果を示すものである。

#### 【0032】

【表1】

	金型温度 $[\text{}^\circ\text{C}]$	キャビティ内温度 $[\text{}^\circ\text{C}]$	キャビティ内圧 $[\text{MPa}]$
実施例1	50	43	12
実施例2	60	49	11

	金型充填前温度 $[\text{}^\circ\text{C}]$	キャビティ内温度 $[\text{}^\circ\text{C}]$	キャビティ内圧 $[\text{MPa}]$
比較例1	21	21	14.7
比較例2	50	24	14.5
比較例3	70	30	14

#### 【0033】

この表1に示すように、金型加熱を行った実施例1、2では、金型加熱を行わなかった比較例1に比べ、当然のことながらスラリー温度が高まっている。さらに、スラリーを事前に加熱した比較例2、3では、金型内に注入された時点でスラリーの温度が大幅に低下してしまっている。これに比較し、実施例1、2ではスラリー温度が大幅に高くなっている。これにより、図6に示される値に基づき、実施例1、2では、キャビティ13内におけるスラリーの分散媒の粘度が、比較例1～3に比べて低くなっていることが確認された。

これに対応するものに、実施例 1、2 では、比較例 1、2、3 と比べ、明らかにキャビティ内圧が低下していることも確認された。キャビティ内圧の低下は水抜け速度（脱水性）の改善を示しており、より短い時間で成形が可能となる。

#### 【0034】

さらに、得られたフェライト磁石を検査した。その結果を図 7 に示す。

この図 7 に示すように、金型加熱を行った実施例 1、2 では、金型加熱を行わなかった比較例 1 に比べ、横クラック、ラミネーションといった不良が明らかに減少し、歩留まりが、概ね 95% 以上に改善され、水抜け性の改善は品質の向上にもつながることが確認された。

#### 【図面の簡単な説明】

##### 【0035】

【図 1】 本実施の形態におけるフェライト磁石の製造工程を示す図である。

【図 2】 複数のキャビティを有した成形装置に対するヒータの配置を示す図である。

【図 3】 成形装置の一部を示す断面図である。

【図 4】 スラリーの温度とキャビティ内圧の関係を示す図である。

【図 5】 金型温度とキャビティ内圧との関係を示す図である。

【図 6】 分散媒の温度と粘性率の関係を示す図である。

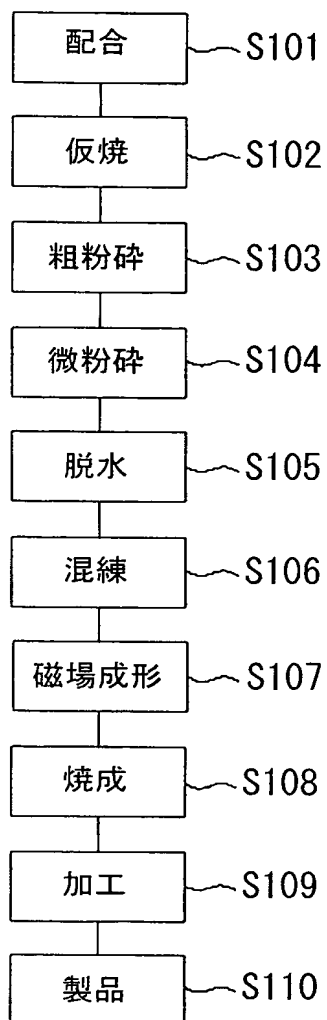
【図 7】 金型の加熱温度と不良の発生率との関係を示す図である。

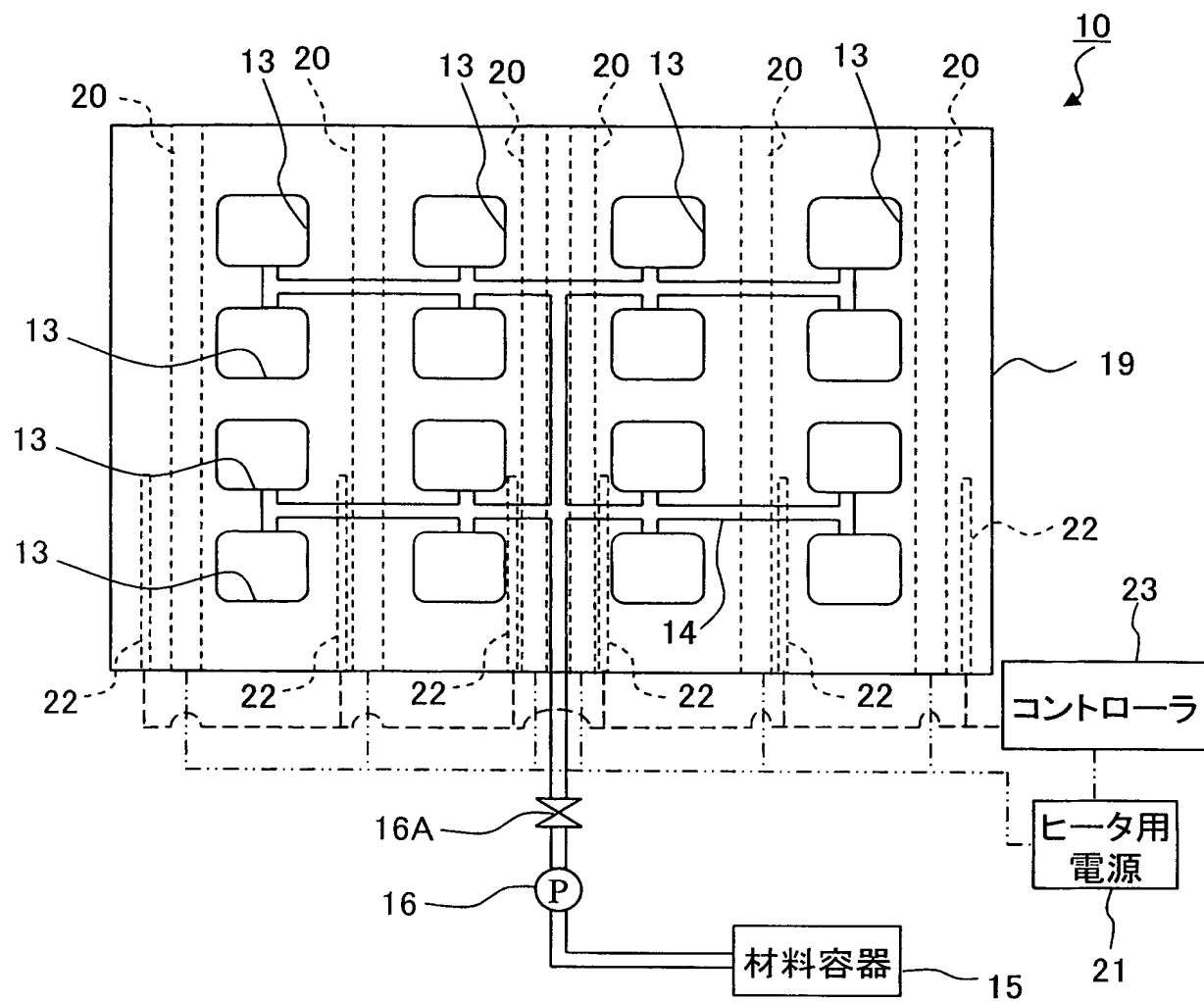
#### 【符号の説明】

##### 【0036】

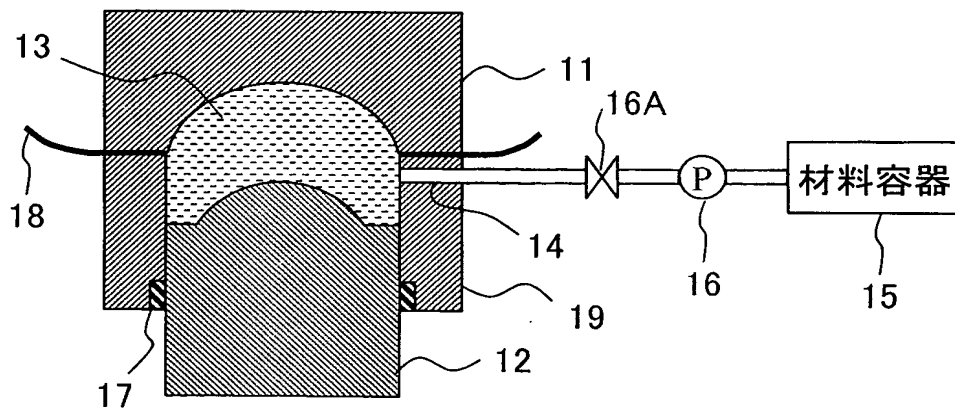
10 … 磁場成形装置、11 … 上型（金型）、12 … 下型（金型）、13 … キャビティ、14 … 注入バス（注入路）、19 … 白型（金型）、20 … ヒータ部材、21 … ヒータ用電源、22 … センサ、23 … コントローラ

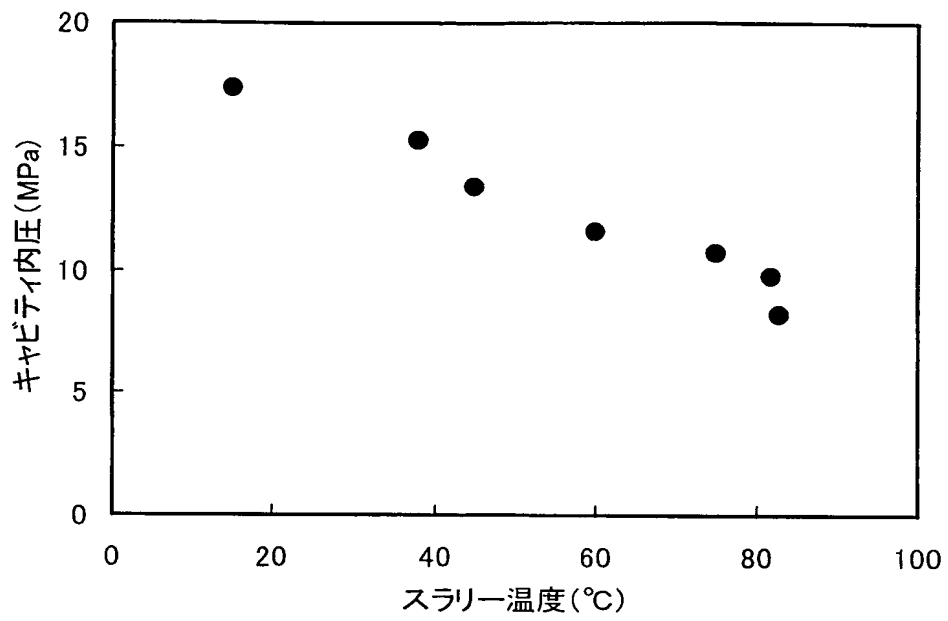
【 図 1 】



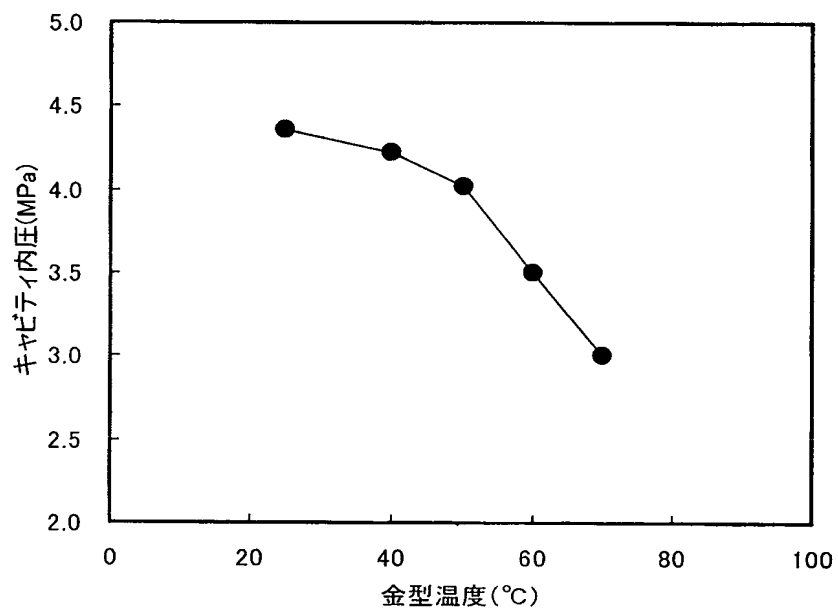


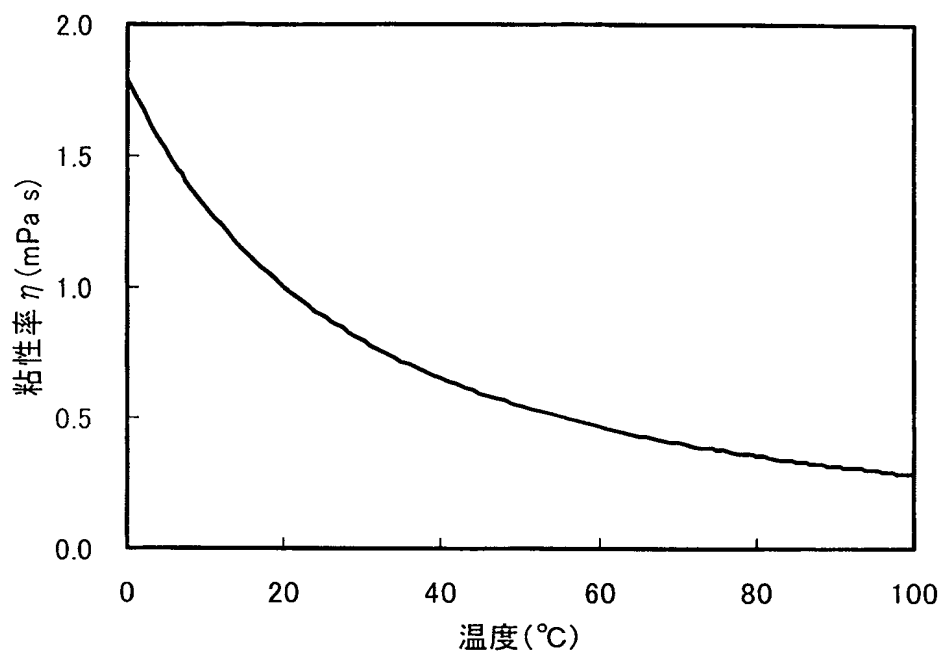
【図 3】



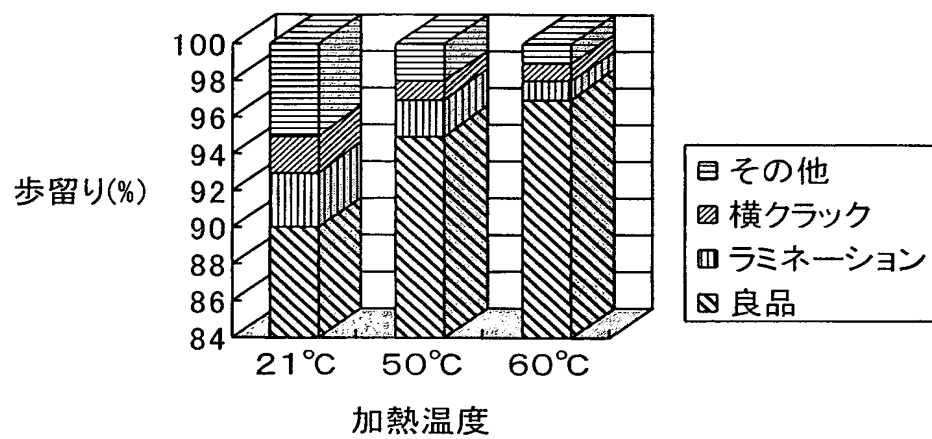


【図 5】





【図 7】



【要約】

【課題】 製造工程における歩留まりを向上させ、品質を安定させることのできる磁場成形装置、フェライト磁石の製造方法を提供することを目的とする。

【解決手段】 磁場成形するに際し、複数のキャビティ13を有した白型19を、コントローラ23の制御により、ヒータ部材20で所定の温度に加熱する。加熱する温度としては、センサ22によって検出される白型19の温度T1が40℃を超え100℃以下となるよう、コントローラ23で制御するのが好ましい。このようにして、白型19を加熱することによって、キャビティ13内における成形用スラリーの温度を高くすることができるので、脱水性が良好となり、製品の歩留まりを向上させることができる。

【選択図】 図2

↓

0 0 0 0 0 3 0 6 7

・ 20030627

名称変更

5 0 0 5 4 0 1 8 7

東京都中央区日本橋 1 丁目 1 3 番 1 号

T D K 株式会社



# Document made available under the Patent Cooperation Treaty (PCT)

International application number: PCT/JP05/006026

International filing date: 30 March 2005 (30.03.2005)

Document type: Certified copy of priority document

Document details: Country/Office: JP  
Number: 2004-103415  
Filing date: 31 March 2004 (31.03.2004)

Date of receipt at the International Bureau: 12 May 2005 (12.05.2005)

Remark: Priority document submitted or transmitted to the International Bureau in compliance with Rule 17.1(a) or (b)



World Intellectual Property Organization (WIPO) - Geneva, Switzerland  
Organisation Mondiale de la Propriété Intellectuelle (OMPI) - Genève, Suisse